

古文 品詞分解 「徒然草」をりふしの移り変はるこそ」問題

をりふしの^①移り変はるこそ、ものごとにあはれなれ。

「もののあはれは秋こそ^②まされ。」と、人ごとに^③言ふ^アめれど、それも^④さるもの^イにて、

いまひときは心も^⑤浮きたつものは、春の気色^ウにこそ^⑥あ^エめれ。鳥の声などもことのほかに

^⑦春めきて、のどやかなる日かげに、垣根の草^⑧萌え出づるころより、やや春深く^⑨かすみわた

りて、花もやうやう^⑩気色だつほどこそ^⑪あれ、をりしも雨風^⑫うち続きて、心あわたたしく

^⑬散り過ぎ^オぬ。青葉に^⑭なりゆくまで、よろづにただ心をみぞ^⑮悩ます。花橘は名にこそ

^⑯負へ^カれ、なほ、梅のにほひにぞ、いにしへのことも^⑰立ち返り恋しう^⑱思ひ出で^キらるる。

山吹の清げに、藤のおぼつかなきさま^⑲し^クたる、すべて、思ひ捨てがたきこと多し。

「灌仏のころ、祭りのころ、若葉の、梢涼しげに^⑳茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の

恋しさも^㉑まされ。」と人の^㉒仰せ^ケられ^コしこそ、げに^㉓さるもの^サなれ。五月、あやめ^㉔ふく

ころ、早苗^㉕とるころ、水鶏の^㉖たたくなど、心細から^シぬかは。六月のころ、あやしき家に

夕顔の白く^㉗見えて、蚊遣火^㉘ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕^㉙祭るこそなま

めかしけれ。

やうやう夜寒に^㉚なるほど、雁^㉛鳴きて^㉜来るころ、萩の下葉^㉝色づくほど、早稲田^㉞刈り干す

など、^㉟取り集め^スたることは秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそをかしけれ。^㊱言ひ続け

ば、みな「源氏物語」「枕草子」などに^㊲ことふり^セに^ッたれど、同じこと、また今さらに

^㊳言は^タじと^チにも^㊴あら^ッず。おぼしきこと^㊵言は^テぬは、腹^㊶ふくるるわざ^トなれば、筆に

まかせつつ、あぢきなきすさびナにて、かつ④③破り捨つニべきものヌなれば、人の④④見る

べきネにも④⑤あらハず。

古文 品詞分解 「徒然草 くをりふしの移り変はるこそ」 解答

をりふしの^①移り変はるこそ、ものごとにあはれなれ。
ラ四体

「もののあはれは秋こそ^②まされ。」と、人ごとに^③言ふアめれど、それも^④さるものイにて、
ラ四体 推定
タ四体 断定

いまひときは心も^⑤浮きたつものは、春の気色ウにこそ^⑥あエめれ。鳥の声などもことのほかに
カ四体 断定
マ四体 推定

^⑦春めきて、のどやかなる日かげに、垣根の草^⑧萌え出づるころより、やや春深く^⑨かすみわた
りて、花もやうやう^⑩気色だつほどこそ^⑪あれ、をりしも雨風^⑫うち続きて、心あわたたしく
カ四体 断定
タ四体 推定

^⑬散り過ぎ^オぬ。青葉に^⑭なりゆくまで、よろづにただ心をみぞ^⑮悩ます。花橘は名にこそ
ガ上二体 完了
ハ四体 存続
サ四体 断定

^⑯負へカれ、なほ、梅のにほひにぞ、いにしへのことも^⑰立ち返り恋しう^⑱思ひ出で^キらるる。
カ四体 存続
サ変四体 存続
ダ下二体 自発
山吹の清げに、藤のおぼつかなきさま^⑲しくたる、すべて、思ひ捨てがたきこと多し。

「灌仏のころ、祭りのころ、若葉の、梢涼しげに^⑳茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の
カ四体 断定
サ下二体 尊敬 過去
ラ四体 推定
恋しさも^㉑まされ。」と人の^㉒仰せられコしこそ、げに^㉓さるものサなれ。五月、あやめ^㉔ふく
カ四体 断定
ラ四体 推定
ころ、早苗^㉕とるころ、水鶏の^㉖たたくなど、心細からシぬかは。六月のころ、あやしき家に
カ四体 推定
ヤ下二体 打消

夕顔の白く^㉗見えて、蚊遣火^㉘ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕^㉙祭ることなま
ラ四体 推定
ヤ下二体 打消
めかしけれ。

やうやう夜寒に^㉚なるほど、雁^㉛鳴きて^㉜来るころ、萩の下葉^㉝色づくほど、早稲田^㉞刈り干す
カ四体 推定
カ下二体 存続
マ下二体 存続
など、^㉟取り集め^スたることは秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそをかしけれ。^㊱言ひ続くれ

ば、みな「源氏物語」「枕草子」などに^㊲ことふりセにッたれど、同じこと、また今さらに
ラ上二体 完了
完了

^㊳言はタじと^チにも^㊴あらッず。おぼしきこと^㊵言はテぬは、腹^㊶ふくるるわざトなれば、筆に
ハ四体 打消意志
断定
ラ変四体 打消
ハ四体 打消
ラ下二体 断定

マ下二 ㊦

④② まかせつつ、あぢきなきすさびナにて、かつ

断定

タ下二 終

当然

断定

ラ上二 終

人の④④ 見る

当然 断定

ラ変 ㊦ 未然

ネ べきノにも④⑤ あらはず。